

# ミュンヘンの文学散歩 (1)

佐野晴夫

## 1. ミュンヘン＝リーム空港からミュンヘン中央駅へ

飛行機で日本を発ち、アンカレッジ経由であれば、約18時間で、モスコア経由であれば、約15時間で、ハンブルクまたはフランクフルトの国際空港に着く。国内線に乗り換えて、ハンブルクから1時間25分、フランクフルトから1時間で、ミュンヘン市東部のリーム空港(Flughafen München-Riem)に到着する。ミュンヘンにもうひとつの国際空港を設置する計画は以前よりあるけれども、環境問題めぐって予定地の住民が反対し、異議を申し立てた裁判の結果、まだ国際空港の建設は進展せず、従って、日本からの直行便は実現していない。

空港より都心(Innenstadt)まで約10kmで、タクシーを使っても20マルクぐらいであるが、ここからミュンヘン中央駅(Hauptbahnhof)北口まで、直通バスが頻繁に往復しているので、これを利用すれば、約25分で到着する。ここは、交通が便利であるばかりでなく、ホテル等も周辺に多い。

ミュンヘン駅の最初の駅舎は、バスを降りた北口より800m西へ行つた所、現在、S-Bahnハッカーブリッケ駅となっている所に、1837年創設された。1847年から2年かけて、かつて射撃場だった場所に中央駅が設けられ、数次にわたり拡張工事が行われ、19世紀末には、現在の駅舎の東北部に位置する翼状のシュタールンベルガー駅舎、さらに20世紀に入って、東南部に位置してS11、S22の始発駅となっているホルツキルヒナー駅舎が増設された。第2次世界大戦中にひどい戦災にあり、今の駅舎は、1950年以降に再興されたものである。

中央駅北口より駅構内に入ると、地下街へ降下するエスカレーターもあるが、ロッカールームの隣りが待合室で、さらに隣り合っているのが交通案内所である。この駅内には、案内所(Information)の頭文字iを青地に白ぬきにした丸い標識が2箇所あり、交通案内所は、列車の発着する中央部に位置するが、もうひとつのホテル案内所は、食堂等の前を通りすぎた駅舎の南端にある。

宿泊所をまだ決めていない人は、リーム空港内のホテル案内所(Tel.907256)

か、この中央駅内のホテル案内所(Tel.2391256~2391260)でホテルを斡旋してもらえらる。気どらないホテル・ペンションでバスが付かなくてもよい個室の場合、朝食付きで30マルクぐらいからあるが、高級ホテルのバス付き個室の場合、少なくとも150マルクを予定しなければならぬ。また2人部屋であれば、45マルクから240マルクを目安にすればよい。ところが、ミュンヘンでは、<sup>フアシテング</sup>謝肉祭・<sup>オクトーバーフェスト</sup>十月祭・<sup>メツッセ</sup>大見本市等の開催期間と重なったりしたとき、市中で宿泊場所が見付からず、郊外の旅館(Gaststätte)や近隣の都市のホテルに行かざるをえないことがある。

ミュンヘン到着後、まず入手したいのは、詳しい市街地図である。ホテル案内所には、日本語版の地図もおいてある。次に購入しておきたいものが、ミュンヘン観光局発行の月刊プログラム「ミュンヘン」(1.30マルク)である<sup>(1)</sup>。横9.5cm×縦21cmのポケットに入る小冊子である。長期であれ、短期であれ、このバイエルの州都に滞在する者がのぞむ基本的情報は、ことごとく収録されている。無論、巻末には、ミュンヘン市街中心部の略図も折り込まれている。警察や領事館の住所と電話番号、市内観光バスや塔のぼり見物について、ホテルの場所や料金について、多様な博物館・美術館・展示館・図書館の種類について、スポーツ競技の日程について、水泳プール場やレンタル・カー等についてまでの知識が盛り込まれている。日本料理を食べたい人ならば、料理店や酒場が列記してある頁をさがせば、「三船」や「大都会」の店名を見付けることができる。とりわけ重宝なことは、ミュンヘン市内で、毎日、数十個所で、オペラ・コンサート・演劇・人形劇等が上演されており、そのスケジュールが満載されていることである。オペラ愛好者ならば、<sup>ナチオナルテアター</sup>国立劇場、ゲルトナー広場の州立劇場、クーヴィエ劇場のプログラムを調べ、前売券発売所の場所を確かめて購入に行けばよい。音楽好きの人ならば、無料の教会でのオルガン演奏やミュンヘン音楽大学の演奏発表会から、10マルク台より聞くことの出来る王宮内のヘラクレス広間・<sup>ザール</sup>ドイツ博物館の<sup>コングレスザール</sup>会議場等での交響楽まで、曲目・交響楽団・演奏者で気に入ったものがあれば、出かけるがよい。オペラにしろ、コンサートにしろ、特別なことがないかぎり、当日券売場(Abendkasse)に行けば、切符が買える。ましてや王宮劇場やミュンヒナー・カンマーシュピール劇場での古典劇や新作劇が観たくなつたとき、希望する座席さえ確保できないのを我慢すれば、観劇を楽しむことができる。小冊子「ミュンヘン」ひとつでもってしても、この都市が「芸術の都」と呼ばれる理由を納得しうるのである。

ミュンヘンは、ヴィッテルスバッハ家のバイエルン王朝が歴代にわたり芸術を奨励して栄えた都市であるばかりでなく、ドイツ帝国や共和政の体制下にあつて

も、南独の政治・商工業・交通の要地でありつづけた。日本人にとっては、ビールと自動車、薬品と電機等の産業で馴染む都市である。そして1972年夏に開催された第20回オリンピックのミュンヘン大会こそ、第2次世界大戦で敗け、破壊された国土を復興させ、戦後の混乱から完全に立ち直ったことを全世界に宣する行事であった。今や、ミュンヘン市は、ベルリン市・ハンブルク市に次いで、約130万人の住民を擁する西ドイツ第3番目の大都会となった。その活力を確かめるために、タウン誌「ミュンヘン」<sup>ハウプトバーンホーフプラッツ</sup>と市内地図を持って、早速、駅舎から、人込みをぬいながら、中央駅前広場へ進んで行こう。

## 2. 中央駅からテレージエン・ヴィーゼへ

中央駅正面口より広場に出ると、左側より宮殿風の裁判所、ヒルティ百貨店、郵便局が眼に映る。手前には、快速鉄道(S-Bahn)の入口や各方面に行き交う市街電車の発着所がある。ホテル案内所のあった駅舎南側に面する大通りがバイヤー街である。この大通りを駅前広場から横断して渡ると、そこが南北に延びるシラー街の入口である。シラー街を1kmほど南下すると、ミュンヘン大学医学部と付属病院の建物が見えてくる。

シラー街を挟み、東にはツヴァイク街、西にはゲーテ街、パウル・ハイゼ街という詩人の名称を冠した通りがある。またすぐ近くには、レッシング街、ウーラント街、リュッケルト街もある。さらにゲーテ街の南端に位置するゲーテ広場からテレージエンヴィーゼへ通ずる街路には、モオツァルト街、ハイドン街、ベートーベン街、シューベルト街といった大音楽家の名前を持った区画もある。これら文人や作曲家の姓名を付した町は、これらの芸術家の生涯と生活とは直接の関係はなく、住民が敬愛してやまない英傑や天才に因み、任意に選び与えた町名にすぎない。しかし、ミュンヘン大学医学部に接して東西に貫通するペッテンコップフェル街の場合、事情は全く異なっている。この街名は、ミュンヘン大学教授で、近代衛生学の創始者であった人物の功績を称えるために名付けられたものである。

マックス・フォン・ペッテンコップフェル(1818-1901)は、バイエルン州ドナウ河畔ノイブルク近郊のリヒテルハイムに生まれ、9歳のとき、ミュンヘン市に移り、1843年にミュンヘン大学医学部を卒業し、1847年に同大学の定員外教授として化学講座を担当し、1853年に正教授となった。1866年にミュンヘン大学に衛生学講座を創設し、1879年には衛生学研究所を開設し、初めて衛生学に実験科学的な基礎を確立した。彼に師事した日本人のひとりが、1884年(明17)10月から1888年(明21)7月まで、陸軍衛生制度および軍陣衛生学を研究するために、ドイツ

へ留学して来た陸軍 2 等軍医森林太郎である。

鷗外森林太郎 (1862-1922) は、ベルリンに到着して 4 日目に、丁度同地に滞在中の陸軍軍医監橋本綱常から、「衛生学を修むることに就きて、順序をたづねしに、先づライプチヒLeipzigなるホフマンFranz Hoffmannを師とし、つぎにミュンヘンMuenchenなるペッテンコオフエルMax von Pettenkoferを師とし、最後にこゝなるコッホRobert Kochを師とせよ諭され<sup>(2)</sup>」て、ミュンヘンにやって来た。それは、1 年 5 カ月後の 1886 年 3 月 8 日のことであつた。彼は、ミュンヘン中央駅北口に面したアルヌルフ街 2 番の「独帝客館」(Hotel Deutscher Kaiser, Arnulfstraße 2) に、暫時、逗留したが、同月 11 日、彼はホイ街 16 番のパルム家 (Heustr. Nr. 16, b, III Etage; bei J. Palm) に移り住んだ。「家は大学衛生部と相対す<sup>(3)</sup>」と、自ら記しているごとく、ホイ街こそ、現在、ペッテンコオフエル街と改称された街なのである。

ペッテンコオフエル教授の住所は、3 月 9 日、大学衛生部で問い合わせ、到着届のため、ミュンヘン府の兵部省、軍団指令部、衛戍指令部等に出頭したあと、王宮前のレジデンツ街 1 番宮廷薬局の建物 (Residenz No. 1, Hofapotheke, III Etage) に住む教授のもとを訪れ、68 歳の「広面大耳の白頭翁<sup>(4)</sup>」から、森鷗外は、緒方正規に次いで、最新の学術知識と実験指導をうけることになった。そして彼がミュンヘンを去つたのは、1887 年 4 月 15 日であり、その折の感懐が、次の漢詩 1 首に託されている。

萬里離家一笈輕。郷人相遇若為情。今朝告別僧都酒。泣向春風落羽城。<sup>(5)</sup>

なお、ペッテンコオフエルが 1901 年 (明 34) にピストル自殺をしたという計報が日本にとどいたとき、彼は小倉の地にあつた。1899 年 (明 32) 6 月から 2 年 10 カ月間、軍医監 (少将相当官) に補されながらも、近衛師団軍医部長兼軍医学校長から北九州の第 12 師団軍医部長に転任させられ、心楽しまぬ時期であつた。左遷の主たる理由は、ドイツより帰国後、森鷗外が、日本の兵学と医学ばかりではなく、芸術の近代化のために、小説「舞姫」(明 23. 1)「うたかたの記」(明 23, 8)「文づかひ」(明 24, 1)を発表し、戯曲に関しても、カルデロン「調高矣洋弦一曲」(明 22. 2) やレッシング「折薔薇」(明 22. 10) を実弟三木竹二と共に訳し、また落合直之、市村瓊次郎、井上通泰、実妹小金井きみ子たちに協力を求めて編んだ訳詩集「於母影」(明 22. 8) 等を皮切りに始めた文筆活動を好ましく思わない人達の意向に起因したようである。おかげで、上記の諸作品を収録した「美奈和集」(明 25, 7、春陽堂)の装丁と挿画を分担した画家原田直次郎<sup>(6)</sup>の葬儀にも出席できなかつた。ミュンヘン時代、シュワーピングの美術学校前 (Akademiestr.)

に居住していた原田直次郎とは、(その愛人マリー・フーバーが森鷗外の下宿の隣り町ラントヴェル街にいたこともあり) 頻繁に一緒に食事をしたり、遠出をしたり、青春の思念や帰国後の野心的仕事について語り合った間柄だけに、帰朝のあと、文学には、叙事詩・劇詩・抒情詩の3大別があることを邦人に初めて例示するためにも、協力を求めなければならなかった同志でもあった。

ふたたび、ペッテンコオフェルに話を戻せば、大学医学部より500mほどへだたった南基地 (Südlicher Friedhof, Thalkirchner Str. 17) に彼は埋葬されている。この基地は旧区域と新区域からなり、彼の墓所は31-1-34である。ここには、ミュンヘンの文化や学術に貢献した著名人が多く眠っており、正方形の新区域では、33-13-5に人目をひく五輪の塔で形づくられた墓石があり、学問好きなバイエルン国王マックス2世 (1811-1864) から、日本研究の最高の権威者として招聘をうけて、この地に移り住んだ医師フィリップ・フランツ・ヴァン・シーボルト (Philipp Franz van Siebold, 1796~1866) の墓所である。幕末の日本に西洋医学を伝えた人物にふさわしい趣向である。ほかに、アーケードの壁画には彫刻家シュヴァンターラー、建築家のゲルトナーやクレンツェの墓標がはめこまれたり、カプチナー街に近い40-12-11には化学者リービヒが埋葬されている。また紡錘形の旧区域では、5-2-1に石版刷りの発明者ゼーネフェルダー、7-10-54に速記術の考案者ガーベルスベルガー、12-2-27に哲学者ヤコービ、13-1-17にマキシミリアン街の建築家ビュルクライン、15-1-5に詩人の祖父で画家だったChr. モルゲンシュテルンが葬られ、そして歴史画家カウルバッハや歴史学者ゲーレスは壁面墳墓に顕彰されている。

ここで、あらたに、ミュンヘン大学医学部で研究生生活をすごした、もうひとりの日本の文人斉藤茂吉のことを想起せざるをえない。ペッテンコオフェル街から駅方面へひとつ戻ったラントヴェル街へ行ってみよう。西方に聖パウロ教会の秀麗な形姿が遠望できる通りである。そのランドヴェル街32番 (Landwehr Str. 32) に、今日、5階建てのビルがあるが、かつては4階建ての建物があり、その最上階には、日本人留学生を専門に下宿さすマリー・ヒルレブラントが住んでいた。良家の娘であったが、若いとき、日本人留学生と恋におち入り、男の子ウィルヘルム (愛称ウィリー) をもうけた。日本を訪れたこともあり、日本人びいきで、留学生にお茶をたてたり、すきやきをつくってくれたり、米をたき、ホーレン草にマギ (イタリア風醬油) をかけて食べさせたりしたことから、「日本婆さん」と呼ばれていた。彼女の下宿に斉藤茂吉 (1882-1953) も世話になった。

斉藤茂吉は1921年 (大10) 10月27日から1925年 (大14) 1月7日まで留学して

いるが、日本を出発するときは、ハンブルク大学のヴァイガント教授の指導をうける予定だった。しかし、ハンブルクで現金と1カ年分の滞在費に相当する金額の信用状を盗まれたことから、信用状が出て来ても、ハンブルクで勉強する意欲を失ってしまい、恩師呉秀三教授の留学先であったウィーン大学医学部神経学研究所のマルブルク教授のもとで研究することにした。だが、マルブルク教授の学問に心服できず、日本の実験精神病学の確立者呉秀三教授から、かつてクレペリンの学説について聞いていたことから、ミュンヘン大学へ移ることにした。

エーミル・クレペリン (1856-1926) は、ライプチヒ大学とヴェルツブルク大学で医学と心理学を学び、1883年ミュンヘン大学医学部精神科講師となった。1886年にドルパート大学教授となり、1890年にハイデルベルク大学に招聘されたが、1903年にミュンヘン大学に戻った。そして1912年にミュンヘン大学に精神医科病院を創設し、1916年には脳医学研究室を開設した。この研究室は、今日、精神医学研究所として、郊外に移り、マックス・プランク研究所の附属機関となっている。斉藤茂吉が帰国した年には、マックス・プランク研究所の前身であるカイザー・ウィルヘルム協会の1機関となっているが、彼の通った精神医学研究所は、ペッテンコオフェル街の隣りのヌスバウム街の精神医科病棟3階にあった。

愛国者クレペリンは、第1次世界大戦 (1914-1918) で青島等でドイツ帝国と交戦した日本人に対して好意を見せず、斉藤茂吉を無視した。その露骨な非協力的態度に斉藤茂吉は立腹することなく、敬意を失わなかった。研究所の所長はヴァルター教授であったが、主任のシュピールマイヤー教授の指導のもとで、1923年8月より、「小脳の発育制止」のテーマで研究を始めた。だが4カ月後に「小脳の今までの検索を放棄せよと教授は単純に吾にいひたる<sup>(7)</sup>」事態になったため、1924年1月5日に新しいテーマ「家兎の大脳皮質における壊死、軟化及組織化に就ての実験的方法」に着手し、同年5月28日に同論文を完成した。その間、「クレペリン『眠りの深さ』についての報告をなしたり嘗ての増補をも為き<sup>(8)</sup>」とか、「初学者のごとき形にたちもどりニックスル染色法をはじめつ<sup>(9)</sup>」といった短歌を詠んでいる。

現在のミュンヘンでは、住宅不足のため、下宿さがして苦勞を強いられるけれども、斉藤茂吉は、肌が脂性で体臭がきついためか、南京虫のいない下宿を見つけるのに苦心した。彼がウィーン大学からミュンヘン大学へ転学して来たのは、1923年7月20日のことである。友人の中井信隆が下宿するヒルレブラント家を訪ね、月末まで滞在した。ベルリンへ2週間出かけて戻ると、ミュンヘン市内で下宿さがしを始めた。紹介してもらった部屋には、いずれも夜となると安眠をさま

たげる南京虫がいた。「夜毎に<sup>とこだに</sup>床蟲のため苦しみていまだ居るべきわが部屋もなし<sup>(10)</sup>」と、歌い嘆くほどであった。南京虫のいない部屋を求める新聞広告を数度掲載し、数十軒の部屋をまわり、試みに宿泊したり、駆除の薬剤を散布したりしたけれども、いずれも失敗に終り、その毎にヒルレブラント夫人の家に舞い戻った。9月4日、やっとミュンヘン中央駅から北方2.5kmのトルヴァルツェン街6番(Thorwaldsen Str. 6)のヘッケル家へ移った。だが、12月15日から、中井信隆が転居したあとの部屋を借り、1924年(大13)7月22日ミュンヘンを去るまで、ヒルレブラント家の下宿部屋4室のうちの1室ですごした。愛惜の情から、「1年をここに起臥したりしかばHillebrand媼は泣きぬ<sup>(11)</sup>」と詠んでいる。

この時期、マリー・ヒルレブラントは、齊藤茂吉の記録によれば、「既に60に手が届くぐらいの齢に達し<sup>(12)</sup>」、息子ウィリーも「すでに30に近い敏捷な若者で」、何かと日本人留学生の世話をしていたけれども、ウィリーの許嫁が母親と仲良く出来ないため、青年はその女性を連れて、シュッツガルトの運送店へ勤めるため、家を出て行った。

それから4年後のヒルレブラント夫人の消息については1928年(昭3)11月21日発行の「伯林週報」第1年第31号(Berlin Wochentlich Schuho)に掲載されたガリ版刷りの記事から知ることが出来る。「ミュンヘンの『日本婆さん』の為に!!(1)」と題して、「南独の都ミュンヘンを訪れた日本人中、マリー・ヒルレブラント夫人、否『日本婆さん』の名を聞かれた人は尠くあるまい。夫人が我が在独同胞のためにつくされてから已に40余年になる。夫人のもとには常に誰か日本人が下宿している。同胞病気の際には親身に及ばぬ看護をつくし、送金のたえた者には私財を投じ、不幸独乙の土となった留学生には懇ろな葬式を弔ひ、且墓参供華をたやさず、かくて夫人のもとに下宿した日本人は已に四百数十人に及び、遂に誰云ふことなく『ミュンヘンの日本婆さん』の称が出来た。然るに今、夫人は不幸孤独の身を61歳の老令と、半身不随の病気と飢えとのために聞くも悲惨な境遇におかれて居ます。この秋、夫人の之までつくされた恩に報ゆるべく、在ミュンヘン邦人並に帰国邦人の間にいささかでもの據金して夫人の老後を慰め救はんとする美挙が企てられました。<sup>(13)</sup>」と報じ、発起人としてミュンヘン市日本名誉総領事シュツセル、九州大学教授岡本正夫、八谷正義を筆頭に、在ミュンヘン委員3名、在日本委員11名の錚々たる大学教授や陸軍将校の氏名が連記され、1口5円の據出金をベルリンの「独乙日本人会」主事手塚宛に送るよう伝えてある。もしここであげられた年数が正しければ、明治20年頃には、すでに日本人のための下宿業をマリー・ヒルレブラントは20歳ぐらいの身空で始めたことに

なる。400余名の下宿人の中には与謝野寛・晶子の夫妻も含まれている。彼等が投宿したのは、第1次世界大戦前までいたバヴァリア環状道路近くのモツアルト街で、転居したラントヴェル街ではない。それは与謝野晶子(1878-1942)がうたった詩篇でも確認できる。

ミュンヘンの宿	与謝野晶子
9月初め、ミュンヘンは	早くも秋の更けゆくか、
モツアルト街、日は射せど	ホテルの朝のつめたさよ。

青き出窓の欄干に	匍ひかぶされる鳶の葉は
朱と紅と黄金に染み	照れども朝のつめたさよ。

鏡の前に立ちながら	諸手に締むるコルセット、
ちいさき銀のボタンにも	しみじみ朝のつめたさよ。(14)

1908年(明41)11月に雑誌「明星」を100号で終刊にして以降、与謝野寛(1873-1935)は創作上の不振におち入って、その打開のため、1911年(明44)11月に単身でフランスに渡り、パリのモンマルトに住んだ。夫の出国までの心労を妻の側から描いたのが、与謝野晶子の唯一の長篇小説「明るみへ」(「東京新聞」1913.6.5-9.17)である。与謝野晶子も、1912年5月にシベリヤ経由で、夫のいるパリへ赴いたが、ひどいホームシックに罹った。それは7人の子どもを日本においてきた悔恨の情から来るものである。1902年暮れに生まれた長男光<sup>ひかる</sup>、翌年の秀<sup>しげる</sup>、1907年の双生児八峰<sup>やっお</sup>と七瀬<sup>ななせ</sup>、1909年の3男麟<sup>りん</sup>、翌年の3女佐保子、さらにその翌年の4女宇智子<sup>うちこ</sup>といった幼い子ども達のことを思い浮べると、いても立ってもいられないほど望郷の念がおさえがたく、食欲もなくし、ふさぎ込み、不意に泣きだしたりして、夫の寛も困りはてた。そこで気分転換に、2人でヨーロッパ各地を旅行することにした。早速、最初に訪問した都市がミュンヘンであった。9月初旬、夜行列車の3等車の板張りの席にからだを横たえ、7人の子供のことを涙ながら思ひだしつゝ、ミュンヘン中央駅にやって来た。その時の短歌に、次のようなものがある。

海底の砂に横たふ魚の如身の衰へて旅寝するかな  
眠ることなく我見る悪しき夢うとましき夢かずまさり行く  
欧羅巴の光の中を行きながら飽くこと知らで泣く女われ<sup>(15)</sup>

結局、与謝野晶子は、仏独について、蘭白英を歴遊したあと、ひとりで10月マルセイユ港より船便で帰国した。与謝野寛が帰国したのは翌1913年(大2)のことである。



与謝野夫妻もマリー・ヒルレンブラントの<sup>ベンジオン</sup>の下宿屋のあったモオツアルト街から、テレージェン・ヴィーゼを展望するか、散策したことであろう。森鷗外は、下宿に移って1週間目に、偶然に、やっと広大な風景を眼にしている。

17日。早起。仕女窓を開き雀を飼ふ。余偶然戸外を望めば、晴日テレジア牧Theresienwiseの線を照し、拜焉神女Bavariaの像半空に屹立す。牧場の南、遥に山嶽を望む。余初め此家を憐す。曾て此奇観あるを慮らず。自ら迂濶を笑ふなり。(16)

モオツアルト街からバヴァリア環状道路 (Bavariaring) を横断すると、もうここはテレージェンヴィーゼであり、バヴァリア女神像まで、1直線に道(Matthias-Pschorr-Str.)が導いている。ミュンヘン児達は、この広い草原を「ドゥ・ヴィースン」と短く呼んでいる。全世界に「ビール祭」として有名な「十月祭」は、この草地の北部を会場にして、9月下旬から10月上旬にかけて、16日間開催される。あたり一面に、ビール飲みのための大テントが張りめぐらされ、見せ物、遊戯施設そしてアトラクションでにぎわう。また草地の南部分では、3年毎に大規模な農業展示会が開かれる。そのほかの催物にも、このヴィーゼが利用されている。

テレージェンヴィーゼからバイエルン州の守護女神であるバヴァリアの像へ記念階段をのぼり、近づいてみよう。女神像の全身だけで15.75m、台座を加えると30mに達する。女神像のうしろから内部へ階段(130段)をのぼりつめると、頭部の小さな開口部から遠望をたのしむことができる。初めは、古代の手本に倣い、レオ・フォン・クレンツェ(1784-1864)によって古典主義的な女性像が構想されたけれども、町名にもつけられている建築家フランツ・シュヴァンターラー(1760-1820)によって、古代ゲルマン風の装いに変えられた。つまり、女神は熊の毛皮の長い衣装をからだにまとい、左手に栄誉をあらわす<sup>オーフ</sup>柏の葉で編んだ冠を優雅にさし上げ、右手は剣をにぎりしめて、右の足もとにはライオンを従えて立っている。この像は、1843年から7年かけて鑄造され、1850年に完成した。そして、バイエルン人の誇りの象徴となった。

バヴァリア女神像をとりかこむU字形の建物は顕彰堂(Ruhmeshalle)である。ルートヴィヒ1世(1786-1868)は、レーゲンスブルク市近郊にドイツの誇る英傑を祀る招魂堂(Walhalla)を建造したのが、あらたに、またこのテレージェン台地(Theresienhöhe 16)にバイエルン国のうんだ偉人を讃える神殿を建てるようにと、建築家レオ・フォン・クレンツェに命じた。1843年から1853年にかけて造営されたドーリア式柱廊をもつ建物は、時代的趣味に叶うものであり、屋根のひさし等には、バイエルン国の歴史上の諸場面が描かれている。72名の著名な英

傑の胸像は、第2次世界大戦後25年たってからつくりなおされたものである。

顕彰堂のうしろ一帯に広がる建物が見本市会場(Messegeleände, Theresienhöhe 15)である。1908年から2年かけて、建築家ベルチュの設計に基づき、シャハイナーが協力して設造したものである。当初は、展示館は北側だけであったが、1962年から1965年にかけて、西側と南側に、今や中心建物として使用されている現代風の大ホールが建てられた。今日、見本市会場は33万㎡の面積に達し、20の展示ホールを擁し、年間20種にのぼる国際見本市や展示会が開催されているほか、重要な会議場となっている。また庭園には、ゲオルギイとヴァケルレの彫刻がおかれ、空間を再構成し、彩どられている。

余論ながら、ドイツに3カ月以上滞在する者は滞在許可を得なければならない。日本にいるうちに、在日西ドイツ大使館または総領事館で、滞在許可申請書2通と写真2葉、滞在条件を承認する契約書、滞在目的を証明する保証書等を提出して許可をうければよいが、時間上、間に合わぬ場合、現地に到着してから手続きを行うことが出来る。住民登録は警察の仕事で、ミュンヘン市では、テレージェンヴィーゼの南端から300mほどの距離にある外人局(Ausländerbehörde)で、そこまで行くには、まず、S-Bahnでマリーエンプラッツ(Marienplatz)まで乗り、U-Bahnのハーラス(Harras)行きへ乗り換えて、3番目の駅がポッツィ街ポツィストリート(Poccistr.)である。地上に出て、道を渡った所に外人局がある。ここに持参しなければならないのは、旅券のほか、入学許可証とか就労許可証とか、滞在目的を証明する書類、費用負担契約書、現地保健所の健康証明書、日本の都道府県の警察が発行する素行証明書といったものが、費用20マルクとともに必要である。勿論、日本と同様に役所仕事の煩瑣な手続きと不快さを、ある程度、覚悟しなければならない。そこには、ドイツ的な官僚主義ビュロクラチーがあるからである。

ポッツィ街も、ミュンヘンに生まれ、ルートビヒ1世(1786-1868)の儀典長や侍従長をし、同市で死んだフランツ・グラーフ・フォン・ポッツィ(1807-1871)に由来するが、単なる貴顕としてではなく、後期ロマン派の図案家・音楽家として愛され、それ以上に人形劇の脚本家として、民衆から親しまれていたのである。言葉を変えれば、後年、どんなに著名な芸術的巨匠になろうとも、その街に住む町民に馴染みがない場合には、町名に選ばれることはない。その典型として、かつて多感な青春時代の1時期をミュンヘンですごしたヘッベルやケラーといった詩人の名前を冠した街が市中にないことを指摘しなければならない。

そこで、今度は、テレージェンヴィーゼより、ヌスパウム街、ペッテンコオフェル街、ラントヴェール街と平行して走るバイヤー街のひとつ手前のシュヴァンター

ラー街に戻ってみよう。ここは、昔、レルヒェン街と呼ばれた通りである。道の右側40番(Schwanthaer Str.=Lerchenstr.40)にケラーが、道の左側46番にヘッベルが、かつて生活をしていた。

スイスの写実主義的小説家ゴットフリート・ケラー(Gottfried Keller,1819-1890)は、チューリッヒで5歳のとき父親を亡くし、さまざまな辛苦と挫折を味わって成長した。州立工業学校を退学すると、画家ペーター・シュタイガーやルードルフ・マイヤーのもとで修業したあと、風景画家としての修練を積むため、1840年に、彼はミュンヘンにやって来て、2年間すごした。初めは、ミュンヘンで有数の繁華街となっているノイハウザー街22番(Neuhauser Str.22)やシュッツェン街3番(Schutzenstr.3)に住んだ。自伝的教養小説「緑のハイネリッヒ」の第3部第10章の終りの個所で、地名こそ明記していないが、南独の首府の初印象について、「そこには名残りの夕陽をあびて、ギリシャ式破風の3角壁面やゴシック式の塔が、いくつも輝いていた<sup>(17)</sup>」といった筆致で、市街の殷盛と市民の活気について描写している。ケラーは、1842年、貧困と困窮のあげく、何ら成果をあげることなく、帰国した。彼は自らの画才に深刻な疑念を抱くようになり、やがて自らの文才を自覚した。1848年秋に、チューリッヒ州の奨学金をもらい、ハイデルベルク大学で学び、1850年より5年間はベルリンで文学修業を重ね、そのあとチューリッヒに戻り、詩人として大成して行った。

ケラーよりも4年早くフリードリッヒ・ヘッベル(Friedrich Hebbel,1813-1863)は、ハイデルベルク大学からミュンヘン大学へ移るため、この大都市にやって来ている。彼は18日間かけて、ハイデルベルクからシュトラースブルク、シュッツガルト、チュービンゲン、ロイトリンゲン、ウルムを経て、1836年9月29日にミュンヘンに到着した。翌日、早速ハンブルクにいる恋人エリーゼ・レンジングへ宛てて、次のような手紙を書いた。「いま、私は、ハンブルクであれば、館とみなされるような家に住んでいます。ところで、ミュンヘンでは館だらけです。驚くことに、この都市の建物という建物が、他国者には、ずいぶん威風堂々と迫り来ます。貧困と困窮は、ここでは珍しく、他所にはないほどの裕福と贅沢がある、と信じさすほどです<sup>(18)</sup>」。しかし、ヘッベルは貧乏学生であった。ミュンヘンに来るに先だち、シュトラースブルクに大まわりしたのは、ヴィルヘルム・ハウフの兄で、「朝刊(Morgenblatt)」の最初の編集長ヘルマン・ハウフ博士を訪ねて、ミュンヘン駐在の通信員にさせてくれと依頼するためであり、またその了解を新聞社の社主コッタから得るために、シュッツガルトへ立ち寄ったのである。7カ月後の1838年4月27日付けの書簡では、エリーゼ・レンジングに金策を依頼している。

「帰国する前に、文学博士として卒業したい。しかも近いうちに。僕の学位論文は、すでに、殆ど出来上っている。大学があびせかけるだろう質問なんか、僕は恐れる必要がない。問題なのは、せいぜい費用のことだけです。このために、僕には40ハンブルク・ターラー、つまり、80グルデン必要なのです。1度、キスティングに、その金を僕に2年の期限で貸すつもりがないか、たづねてくれたまへ。名誉をかけて言うけど、おそくとも2年以内にその金を返債します……ついでに申しますと、僕はミュンヘン大学ではなく、エルランゲン大学で学位を取得することになるでしょう。つまり、エルランゲン大学であれば、もっと安上がりです。単なるヘッベル氏という代りに、博士様をご帰国なさるとすれば、君にとっても、厭なことではないでしょう。僕も文学博士として、いつでも、またどの大学でも、僕の気に入った時と場所とで、講義をして、講師の経歴をつくる資格がとれます。勿論、そうしたい気持は、さらさら持っていません。問題なのは、わずかの40ターラーにすぎません<sup>(19)</sup>」。結局、同年秋に、母親や親友エーミル・ルソーが亡くなってしまい、学業を続けることが出来なくなり、ハンブルグへ引きあげることにした。この時期、ヘッベルは、友人ヨーゼフ・シュヴァルツ・ベピィの両親の家に寄宿していたので、ベピィだけがミュンヘンの郊外まで見送った。「ずいぶん晴れ渡った寒空の日、朝6時、僕は(1839年)3月11日、ミュンヘンから出て行った。ベピィはルートヴィヒ街のはずれまで、小背囊を運んでくれた。ここから、それを僕が自分の背にかついだ……ベピィは2時間以上も、僕に同行してくれた。ひっそりと森の中にある農夫むけの居酒屋で、いわゆる寒々とした宿屋で、僕達は最後のビールを一緒に飲んだ、それから、果しない涙を流しながら、別れて行った<sup>(20)</sup>」と、日記に書きのこしている。失意を抱きながら、ミュンヘンを去ったひとりであるが、13年後、即ち、1852年、ヘッベルは自作の戯曲「アグネス・ベルナウワー」が初演された折にミュンヘンを再訪し、国王マックス2世に謁見している。また1860年11月、パリ旅行の途中にミュンヘンに立ち寄り、国王よりマクシミリアン学芸勲章を授与されている。なお、学生時代の思い出のひとつとして、作品の上では、レルヘン街45番に住んでいた指物師の親方アントン・シュヴァルツの娘が、「マリア・マグダレーナ」(1844)のモデルになっている。

話をシュヴァンターラー街にもどすならば、森鷗外の留学時代には、すでに以前の街路名から変更され、この街71番の「普通新聞」(Allgemeine Zeitung)編集局に彼の草した1文を持ち込んだことがある。1886年3月6日のベルリン地学協会の講座「日本」においても、また同年12月に「普通新聞」掲載の「日本列島の地勢と人民」においても、1875年(明8)から1885年(明18)まで日本政府の御

用学者であったエドムント・ナウマン (Edmund Naumann, 1850-1927) が、(たとえ日本の地質学上の貢献が偉大であろうとも) 日本の地勢・風俗・政治・技芸をドイツ人に説くとき、事実と悖る不穏な発言を重ね、日本人を誹謗したことから、森鷗外は論駁の筆を執らざるをえなくなった。ベッテンコオフエル教授の校閲をえたうえで、彼は新聞社に持参し、年末29日の紙上に掲載された。年を越して、さらに両者の論議が続けられた。

現在では、当時権威をもっていた「普通新聞」は廃刊となっているが、中央駅に面したバイヤー街には、「ミュンヘン神使紙」(Münchener Merkur) や「日刊」(tz) といった新聞社の社屋が見当る。

### 3. ミュンヘン中央駅からカルル広場 (シュタッフス) へ

駅北口からブリイルマイヤー街の古色蒼然とした、1906年から2年がかりで建造された裁判所に見とれ進もうとも、駅正面口から百貨店と郵便局とはさまれた歩行者天国のシュッツェン街を、かつてケラーが居住したあたりだと想起しながら進んで行っても、駅南口よりバイヤー街を東進しても、3本の道は、いずれもカルル門 (Karlstor) に至る。

トーマス・マンの短篇小説「神の剣」の冒頭の書きだし「ミュンヘンは輝いてた<sup>(21)</sup>」を実感として、明るく透明な青空のもとで、幾多のドイツ詩人の住んだ旧居の景観や諸作品に描かれた巷のたたずまいを見ようと出かけるのも結構だが、その前に、のどの乾きをいやし、食事をとっておこうと思う人は、バイヤー街の右側、カルル門の近くの「酒都マテーザー」(Mathäuser-Bierstadt) へ寄ると良い。世界で屈指の大ビアホールである。ここでミュンヘンのビールについて話しておこう。

ミュンヘン市の水道の水は、カルシウムを多量含有するため。そのままでは飲用に適さない。そのまま、水を煮沸すると、薬缶の内側にはカルシウムの結晶がべっとり付き、その熱湯を日本茶や紅茶に注いでも、本来の味も香りも出てこない。それどころか、瞬く間に、タンニンと化学変化をおこし真黒くなってしまう。真水を確保したければ、化学薬剤で濾過するか、ミネラル・ウォーターを使用するかであるが、沸騰した湯をコーヒー・ドリッパーで漉すのが最も手軽い方法である。ところが、飲用に適さないこの硬水こそが、ビールには最適なのである。

1516年にウィルヘルム5世によって制定された「純粋法」という最古の食品法によって、水・大麦・ホップ以外のものを醸造に使用することが禁止されたため、

バイエルのビールは、今日でも、自然製法からのみつくられている。淡色のヘル・ビールと黒ビールは、醸酵前に11.2%の麦芽汁を使い、メルツェン・ビールは3月に仕込むビールで、アルコール度が高くなるように、13.4%の麦芽汁を使用する。さらに濃度の高い18.9%の麦芽汁を使用するボック・ビールは、冬期や5月に飲用する。また特殊なものとして、<sup>ツァイス</sup>白ビールは軽口の、幾分泡の出る種類で、レモンの皮など加えると、爽やかであり、原料は小麦からなっている。甘口のラートラー・ビールは女性向きで、左党は敬遠した方がよい。そして1977年以降製造されているバイエルン風のアルト（昔風）・ビールは、コクがあり、美味である。

これらは、ビールの基本的な種類であり、一口にバイエルン州にはビール醸造会社120社あると言われる。オリンピックスタディオンで行われるフットボール試合を見ながら飲むコップには、ホーフブロイハウス・レーヴェンブロイ・パウラーナーブロイ・シュパーテンブロイ・アウグスティナーブロイ・ハッカー＝プショール＝ブロイの各社商標をあしらってある。各社が季節ごとに数十種類のビールを発売しているので、各人が好みのものを見付けようとすれば、ずいぶん日数がかかることになる。

ビア・ホールでの容器は、陶器でなく、ガラスのジョッキであるのが普通である。多くのビア・ホールでは1ℓ入りのジョッキしかおいてないけど、それを「ディ・マース」と言い、半リットルを「アイネ・ハルベ」、4分の1リットルを「アイネ・クヴァンテル」と呼んでいる。日本で通常飲んでいるラーガー・ビールに相当するのが、ドイツでは「エックスポルト」であり、それよりホップのきいた苦味のものがほしい人は、「ピルスナー」を注文すればよい。グラスの下に敷くコースターは、各店とも凝った意匠の、歴史をしのばすものなので、店内の記念品売店で購入するのも一興である。

#### 4. カルル広場（シュタッフス）

ヨーロッパの中央に位置するミュンヘンは、中世期に、塩の取引を機縁に商業都市として繁栄した。このカルル広場（Karlplatz）を東西に走る塩街道があった。そしてそこに「ノイハウザー門」が建っていた。バイエルのルートヴィヒ国王が、1300年頃、城砦を築いていたが、それをカルル・テオドル選帝侯（1724-1799）が造りかえ、都市防衛にふさわしくしたことから、「カルル門」（Karlstor）と呼ばれるようになった。歴史上、幾度となく破壊と建築が行われ、かつて内堀に立っていた1対の前塔とそれをつなぐ壁面しか今では残存していない。それも、第2

次世界大戦中に爆破されたものを修復したものである。門前にはモダンでシンプルな噴水が市民のやすらぎを誘い、数層からなる地下街は、百貨店や商店、さらには地下鉄を利用する人々で活気がある。

この広場は、「シュタッフス」(Stachus)という愛称でも呼ばれている。一説には、料理店「シュタフス園<sup>ガルデン</sup>」(1755年)をつくった店主オイシュタヒウス・フェーデル(Eustachius Föderl)に因むと言われるが、別の説では、旧植物園地区に石弓射撃場があり、「石弓矢射手」(Stachelは石弓の矢を意味した)に由来する、とも言われている。

## 5. カルル門から聖母広場へ

オリムピックに備え、1971年に地下鉄を開通させ、地上の市街電車の軌道を撤去したのを機会に、カルル門から聖母広場(Marienplatz)まで、殷賑を極める商店を買物する歩行者の天国となった。この大通りは、途中でノイハウザー街からカウフィンガー街と名称が変わるが、道の両側には、いくつもの百貨店や高級専門店、銀行やレストラン等が立ち並び、情趣あふれるカフェ・テラスや物売りの屋台、旅情をそそる街燈やリヒアルト・シュトラウスの泉、その脇では多才の大道芸人が音楽や早業の絵画で通行人達の足をひきとめる。

ケラーの旧居(Neuhauser Str.22)を除き、この街路にはドイツ詩人と結びつく事蹟はないとは言いながらも、道の左側には歴史的に注目すべき建物がひしめいている。

まず足をとめるのが「市民ホール」(Neuhauser Str.48)の2層からなる建造物である。ジョヴァンニ・アントーニオ・ヴィスカルディの設計で、1710年にゲオルク・エッテンホーファーが建築した教会である。階下には、第3帝国時代に迫害を受けたジェスイットのルーベルト・マイヤー神父の墓(1945年死亡)もあるが、階上は、1610年に設立された「ミュンヘン市民・紳士協会」の集会場である。

少し歩を進めると、16世紀末にフリードリヒ・ズストリスが建てたジェスイット教団の神学校の玄関が見える。今では、ここは「旧美術学校」(Neuhauser Str.51)と呼ばれている。1783年には、バイエルン国立科学アカデミー<sup>アルテアカデミー</sup>の所在地となり、1774年より1843年まで宮廷図書館と文庫が入居し、1784年より1885年かけて美術学校がおかれ、1826年より1840年までは大学が同居したことのある建物である。

この東隣りに、ドイツで最もすぐれたルネッサンス様式の教会と称せられている聖ミハエル教会(Neuhauser Str.52)がある。建物正面に17体の像が見える。カルル大帝をはじめとして、カトリック教信仰の篤つかったヴィテルスバッハ家

やハプスブルク家の諸王の立像が並べおかれている。またこの教会には、ミュンヘンを本拠とするヴィッテルスバッハ王家の地下納骨堂がある。1908年(明41)6月8日、再度、ドイツを旅していた宗教学者姉崎嶺風(1873-1949)は、この寺院を訪れている。「ペンテスコステの日曜日では寺々には勤行がある。ジエスイトの寺院ミカエルに行つて見ると、盛な音楽、管弦に声の合唱で軍歌の様なマーチの様な曲を奏する。ファウストのオペラで凱旋の場の様な心地がする。寺のバロック装飾とこの音楽と相合して、いかにもジエスイトラしい、西洋法華と云つてよからう<sup>(22)</sup>」と、その印象を語っている。

道路をへだてた次の建物がアウグスティナー教会(Augstinerkirche, Neuhauser Str. 53)である。この建物内に、不思議な取り合わせであるけれども、ドイツ狩猟博物館(Deutsches Jagdmuseum)がある。

この建物の先きはカウフィンガー街にかわる。リープフラウエン街へ左折してみよう。大聖堂に面した商店「ヒーバー・マックス」(Liebfrauenstr. 1)は、観劇や音楽会の前売券を購入できる店のひとつである。眼前には、大聖堂(Dom und Stadtpfarrkirche Unserer Lieben Frau)の2つの西塔がそびえ立っている。時代色を帯びた黒っぽい赤煉瓦造りのこれらの塔には、玉葱をのせたような天頂がユニークである。郊外から遠望しても見分けることが出来、ミュンヘン市の象徴となっている。昔、この地に聖母礼拝堂があり、1271年に後期ロマネスク様式の教会が、塔とともに建立されたのである。有料ではあるが、99mの塔にのぼれば、市街の俯瞰は言うまでもなく、晴天のときには遠くアルプスの連山も展望できる。

ふたたびカウフィンガー街に戻るならば、その23番に、かつて宿屋「黒鷲亭」があり、1786年9月7日に、ゲートルはメラーの匿名で逗留したことがある。

もう、この先きは聖母広場(Marienplatz)である。この広場は、19世紀にこの名称をもったが、かつては農夫たちが作物を売りに集まった市場であった。現在、地下鉄(U)と快速電車(S)とが交叉し、乗り換え地点となり、買物が便利であることから、この大都市の中心となっている。

この広場は、すぐ右に曲がった所にあるリンドナー市場<sup>マルクト</sup>と並ぶ古い商業地であったが、1315年にルートヴィヒ皇帝より、この広場に建物を許さぬ政令が發布された。また1310年には旧市役所(Altes Rathaus, Marieplatz 15)が建造された。そして脇に、第2次世界大戦中爆破されたが、かつて市庁舎塔が立っていた。第1次の都市防備施設の残存物で、「タールブルック門」(Talbrucktor)と呼ばれるものが、修復されている。

ところで、聖母広場の北側に、1867年より1909年にかけて、前後3回にわけて、



新市役所 (Neues Rathaus, Marienplatz 8) が建築された。時代の推移を反映するフランドル風のこのゴシック建築物は、第2次世界大戦で一部焼け、被害を受け、背後部分はかなり改造された。もとからまとも独立しているとみなされる初期建築 (1867-1874) では、煉瓦を砂岩で接着し、その拡張工事 (1889-1892) では、ほとんどが煉瓦で、後期建築 (1899-1903) では、石灰岩と凝石灰で建てられた。そのため、外観で見分けることが出来る筈だ。正面には紋様や人物の彫刻が豊富に飾られ、バイエルンの大公、選帝侯、国王、また聖者像、伝説の人物、ミュンヘンの典型的な人物、さらに紋章、仮面飾り、動物像が見てとれる。

13階から成っている塔は、高さが80mもある。42個の鐘を打ち鳴らすグロッケンシュピールは、47個の鐘のアントワープ、43個のリエージュとガンに次いで、ヨーロッパで4番目の規模のものである。毎日、11時に、張出窓の上下に2個所の舞台上、鐘の音に合わせて、人形がミュンヘンの歴史のエピソードを劇的に演ずる。上段では、1568年のウィルヘルム5世とレナータ・フォン・ロートリンゲンとの結婚式における馬上槍試合の場面を再現し、下段では樋屋のダンスを愉快地舞うので、この時間帯には、広場が観光客でうまり、日本人にも必ず数名は出会える。また冬期では19時半、夏期では21時半に、8階の2つの張出舞台では、左にカンテラ燈を携えて角笛を吹く夜警、右にミュンヘンの子供等に祝福を与える平和の天使が現れてくる。

これらの鐘を尖塔で機械的に各音を打ち鳴らすことが出来るが、鐘の大きさは18cmから25cmまで、音階はF0からC4までである。壮麗な庁舎とグロッケンシュピールの人形劇を落着いて観たい人には、広場の向い側の喫茶店 (Café am Dom, Marienplatz 2) へ、エレベーターで昇り、コーヒーか、ビールを飲みながら時のたつのを忘れるのも悪くない。

さて、聖母広場の中央部で人目をひくのが、「<sup>マリーエンゾイ</sup>聖母の柱」である。これは、30年戦争中に、スエーデン軍の激しい攻撃を受けながらも、ミュンヘンが救われたことを記念して、1838年、選帝侯マキシミリアン1世がテーゲルン湖産の赤大理石から造らせたものである。その石柱碑の上部のマリア像は、王冠をかぶり、王笏を右手にもち、幼児キリストを左手にかかっている。広場の東南の片隅には「魚の泉」 (Fischbrunnen) がある。初め、1862年から3年かけてクノールによって制作されたが、1944年に破壊されたので、残存する彫像を使用して、1954年にヘンゼルマンの手によって、あらたに制作されたものである。何とも忘れがたい味わいをもつ泉のひとつである。

《未完》

1990.4.10

## 註

- (1) München. Offizielles Monatsprogramm des Fremdenverkehrsamtes München mit Unterkunftsverzeichnis und Vorschau. Herausgeber und Redaktion: Fremdenverkehrsamt München, Rindermarkt 5, Tel 23911.
- (2) 森林太郎「独逸日記」(「鷗外全集」第35巻 昭50.1、岩波書店) S.88.
- (3) ibid. S.136.
- (4) ibid. S.135.
- (5) ibid. S.161.
- (6) 原田直次郎(1863-1899)を森鷗外は「直二郎」と誤記しているが、父親の元岡山藩士原田一道を少将として記憶している。原田直次郎は、江戸小石川に生れ、大阪で漢学を保潜に学び、フランス語を大阪開成学校および東京外語学校で学習した。11歳で山岡成章に絵を学び、20歳のとき高橋由一の天絵学会で洋画を学んだ。1884年にドイツに留学し、ミュンヘンのガブリエル・マックスに師事し、1887年帰国した。東京本郷に私塾鐘美術館を創り、後進を指導した。門下には和田英作、三宅克己、小林萬記、久保田半斎、大下藤次郎、伊藤快彦達がいる。内国勸業博覧会の審査官となったり、シカゴ博覧会美術出品の鑑査にあたった。常にモデルを用い、实景に対して絵を描くのは習作の手段で、真の絵画を創ろうとすれば、形を頭脳から創造しなければならぬと、写意主義を提唱した、代表作に「騎龍観音」「毛利敬親公肖像」「素盞鳴尊」「靴屋のおやじ」「老人」などがある。脊髄病に罹り、1899年(明32年)12月に36歳で逝った。
- (7) 「斉藤茂吉全集」第2巻(昭28.3、岩波書店) S.132.
- (8) ibid. S.130.
- (9) ibid. S.109.
- (10) ibid. S.112.
- (11) ibid. S.182.
- (12) 斉藤茂吉「日本嫗」(昭27.6、「斉藤茂吉全集」第8巻) S.206.
- (13) 伯林週報(1928.9.21、T.鈴木編集発行、Gossowstr. 1, W30) S.5. (京都大学附属図書館所蔵)
- (14) 与謝野晶子「ミュンヘンの宿」(「現代日本詩人全集」序巻、昭29.11、創元社) S.334.
- (15) 与謝野晶子「夏より秋へ」(「与謝野晶子全集」第2巻 昭51.10、文泉堂) S.200.
- (16) 森林太郎「独逸日記」(既出) S.136f.
- (17) Kellers Werke. Bd. 5 in 5 Bden. 1968, Berlin u. Weimar. S.116.
- (18) Friedrich Hebbel: Eine Autobiographie nach Tagebüchern und Briefen. Manesse Verlag. S.107.

(19) ibid. S. 128f.

(20) ibid. S. 146.

(21) “München leuchtete.” Thomas Mann: Gladius Dei. (Gesammelte Werke Bd. 8 in 12 Bden. 1960, S. Fischer Verlag.) S. 197.

(22) 姉崎嘲風「停雲集」(明44. 7、博文館) S. 345.